

週刊

日本医事新報

Japan Medical Journal

No.4557

2011年
(平成23年)

8月27日

質疑応答

肺気腫とCOPDの区別・酸素投与の是非

心房細動による脳梗塞が肺梗塞より多い理由

健診でHBc抗体陽性例の感染源推定・予後・治療

学術

I型アレルギー診療の現状と最近の進歩……………岡田正人

PC医のための消化管出血の診かた……………竹島史直

エッセイ

軍医たちの黙示録……………帚木蓬生





尾崎発

長尾和宏の

町医者で行こう!!

第6回

相馬野馬追とフクシマの復興

1 過ちは繰り返された

66回目の敗戦記念日をフクシマの悲劇に重ね、例年にもまして厳粛な気持ちで8.15を迎えた。「過ちは繰り返しません」と言いながら、66年後にまた過ちを繰り返してしまった現実を我々はどうか考えるのか。

フクシマは一見、焼け野原になった66年前の日本と重なる。しかしよく見ると異質な風景だ。先がまったく見えないのだ。「希望」という言葉をどこに見出していけばいいのか。

歴史は147年前にさかのぼる。会津藩主・松平容保は京都守護職として池田屋事件、禁門の変で尊攘派を弾圧、長州藩を憤激させた。その後、戊辰戦争では奥羽越列藩同盟として官軍と戦った。特に会津・白虎隊は、幕府軍として最後まで戦った。

こうした経緯から、明治新政府は東北地方を差別し、国家的な投資開発や近代産業から少し遠くに置いた。政治的につくられた「過疎」のなかに、今度は一転して「原発」が推進されてきた。核廃棄物が集められるのも青森県だ。東北は二重の差別を乗り越えてきた。その上、たび重なる自然災害にも耐えてきた。世界が絶賛した東北人の忍耐強さの秘密は、そんな土壤にあるのだろうか。

2 町医者と室内熱中症対策

そんな東北の避難所でも、節電と熱中症対

策に苦心していると知り心を痛めている。町医者として下町の在宅患者さんを訪問すると、熱中症でぐったりしている姿に毎日のように遭遇する。あれだけメディアで熱中症対策が啓発されていても、日常的に起こっている。

特に古い鉄筋のマンションなどでは、夜間の室内熱中症が問題になる。日中と夜間の室内熱中症の発症頻度は、ほぼ同等だそう。この対策を過小評価してこなかったか、今頃になって自問している。

今後の目玉政策である「地域包括ケア」の中にも、「多職種連携による室内熱中症対策」を織り込むべきではないだろうか。フクシマ以降、病院や研究所のみならず、町医者も「節電」という課題と向き合うことになった。「節電」と「室内熱中症対策」をどう両立させていけばいいのだろうか。

3 関西の節電状況

先日、厚労省を訪ねて驚いた。廊下の電気はすべて消えエレベーターも半分止まっている。中の職員は汗だくになって働いていた。

一般企業も公共スペースも、いたるところが節電モードだった。あたかもトウキョウが、フクシマに償っているようにも感じたが、それだけではない。仙台から乗った常磐線の車内も真っ暗。被災地も節電モードだった。

さて、西日本はどうだろうか。驚いたくらいだから、東西でかなりの温度差があるのだ。

私が暮らす阪神間では、正直関東ほど切迫した節電モードは感じない。しかし先日訪ねた関西電力の営業所では、蛍光灯は半分に間引きされ、29度に設定された室温の中、みな汗を拭きながら働いていた。

私の診療所の室温は28度。熱中症の患者さんも運ばれて来るのであまり暑くはできない。もちろん、レスピレーター装着中の在宅患者さんには、非常用電源の確保・確認を行うなど、停電への備えは怠らない。

3.11以降、町医者においても災害医療の重要性が高まっている。診療所も患者さんも物心両面で災害に備えることは極めて大切だ。震災から5カ月が経過した現在、思うのは「防災こそ最高の予防医療である」。この言葉は、学校医としての健康教育、産業医としての訓話などで、何度も大きな声で伝えてきた。

4 相馬野馬追に見たフクシマのDNA

7月23日、福島県相馬市と南相馬市で行われた「相馬野馬追」を見物した。例年は500騎もの騎馬武者が勇壮に走り回る祭りだが、今年は原発事故の影響で騎馬数は例年の6分の1だった。南相馬市が原発事故の避難の影響で4つの区域に分断されているので、直前まで開催自体が危ぶまれていた。原発事故は、1000余年続くこの祭りをも分断した。しかし規模は縮小されど荘厳かつ勇壮に、4日間にも及ぶ野馬追行事は完遂された。

前夜祭で、歌舞伎役者の尾上菊之助氏が「藤娘」を踊った。みんな泣いていた。その涙にはいくつもの意味があっただろう。懇親会で医師でもある立谷秀清・相馬市長についていただいた酒には、「そうま、夢」と書いてあった。当日には、人口3~4万人余の小さな町に、日本中から様々な要人が集った。おそらく全員が勇壮な騎馬武者にフクシマのDNAを体感し、「復興」を確信したのではないか。

この祭りと前後して、東京大学の上昌広特



勇壮な騎馬武者が町をねり歩いた「相馬野馬追」

任教授を中心とするチームが、相馬、南相馬、飯舘で放射能説明会と住民検診を行っている。住民の健康状態の評価と不安軽減が目的だ。

さらに南相馬市は8月13日、喜ばしい発表を行った。市内の小中学生を含む900人の住民の内部被ばくの調査を行った結果、体内に取り込まれた放射性セシウムによる被ばく線量が、今後50年間の換算でほとんどの人は0.1ミリシーベルト以下だったという。

まだ調査規模が小さく喜ぶのは早計かもしれない。今後、規模の拡大とさらなるデータ公表が待たれる。信頼できる調査と情報こそが、住民の不安を軽減させる王道であろう。

二重に差別され、さらに原発の被害に遭いながらもひたすら復興を目指すフクシマ。それはもはや理屈ではなくフクシマのDNAだ。

だから多少のセシウムが検出されても、福島の人たちが作った野菜や肉などを率先して食べたいと思う。齢五十を過ぎた大人には影響はないはず。高圧洗浄や土削りに加えて、新たな除染手段の開発も急がれる。我々は、様々な方法でフクシマを助けなければならない。第二の敗戦記念日を作ってはいけない。これは医療者全員の「智慧」と「絆」で必ずできると信じている。

なお かずひろ：1984年東京医大卒。95年、尼崎市に複数医師による年中無休の外来・在宅ミックス型診療所「長尾クリニック」を開業。近著に『共震ドクター 阪神、そして東北』（ロハスメディア）など。